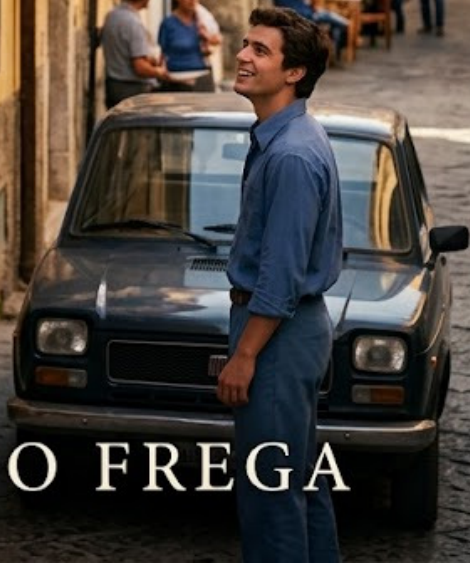


MY AUNT NORA



FERDINANDO FREGA

ノーラおばさん

The Art of Attraction · 06

ここ数日、この名前が何度も頭に戻ってきた。彼女は母の隣人だった。1963年に母を娘のように迎え入れ、おそらく初めて、誰も母に教えたことのなかったものを与えてくれた女性だ。愛情を。

私は、自分の母親についても、亡くなったほかの人々についても、安易な判断を下すような息子ではない。私のはただ、人間の行動を分析する自由な試みにすぎない。言い訳もなく、何ひとつなく、まるで裸の王様のように。

そしてこのナポリの婦人は、いかにもスウェーデン人らしい顔立ちで、青い目、白い肌、中背、微笑むことに慣れていた。そしていつも、甘く人を惑わす声と生まれつきの機転で、世界のこの緯度に生まれた人々が心得ているやり方で、考えさせる何かを残していった。どうして彼女は私にあんなことを言ったのだろうか？

1985年のことだった。私はコゼンツァで働いていて、彼女を訪ねた。私にとって彼女はノーラおばさんで、彼女は親しみを込めて私をフェルディナーと呼んだ。彼女は姉テレザの名付け親だった。母からの贈り物で、彼女はいつもそれを感謝していた。そしていつも私たちのことを尋ねていた。

最後に私に会ったとき、私は7歳を少し過ぎたばかりだった。そして今、20歳の私に彼女が見ていたのはひとりの若者だった。だが私が身につけていた認知の布地が何でできているか、彼女はよくわかっていた。

私への愛情は違ったかたちで現れ、私はそれを感じ取れた。だが彼女は自分を抑えていた。思っていることをすべて口にするのを、わざと止めようとしているかのように。

その午後、彼女の娘のレツラにも会った。歯科医で、母親の魅力と父親の優雅さを備えた美しい女性だった。彼女は温かく私を迎え、言った。「本当にあなたなの、フェルディナンド? 2年間うちの向かいに住んでいた、あの子?」

最初は微笑みで答え、それから言った。「そう、僕だよ。今日私たちがいるこの場所の、最高のバージョンさ」みんな笑い、みんな見つめ、それから別れの挨拶と出発。それが私たちの最後の出会いだった。

車に乗り込むわずかな間に、2階上のバルコニーから私の名前を呼ぶ声が聞こえた。ノーラおばさんだった。「フェルディナ一、戻っておいで。もう一度あなたに会いたいのに」

「私は彼女に微笑んだ。それが叶わないことはわかっていた。私の務めはもう果たされていた」

本物の裸の王様は、聡明な女性の前では、まさにそのままにいる。母親がこの世に産み落としたままの姿で。

そして私は、母の息子だった。

Ferdinando